

肢体不自由児に対する園芸療法の一考察 —プログラム経過とともに変化する母親の視点—

内田雅子¹, 藤岡真実², 嶺井毅², 増田寛司¹, 若野貴司³, 浅野房世¹

¹東京農業大学大学院農学研究科・²東京農業大学農学部バイオセラピー学科 神奈川県厚木市船子 1737

³公益財団法人そらぶちキッズキャンプ 北海道滝川市江部乙町丸加高原 4264-1

Effectiveness of Horticultural Therapy for a Physically Handicapped Child:
A Mother's Changing Perspectives through a Series of Therapy Programs

Masako UCHIDA¹, Mami FUJIOKA², Tsuyoshi MINEI², Hiroshi MASUDA¹, Takashi WAKANO³, Fusayo ASANO¹

¹Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture 1737 Funako, Atsugi City, Kanagawa

²Tokyo University of Agriculture, Faculty of Agriculture, Department of Biotherapy 1737 Funako, Atsugi City, Kanagawa

³Solaputi Kids' Camp 4264-1 Ebeetsucho, Maruka Kogen, Takikawa City, Hokkaido

Keywords: *mother-and-child relationship, transition of perspective, horticultural therapy*

キーワード: 母子関係, 母親の視点の移行, 園芸療法

要 旨

在宅で生活をする肢体不自由児は母親との接触がきわめて多いため、子どもは思春期における自立に必要な「親の目の届かない領域」を作るとは難しいといわれている。在宅で生活する肢体不自由児の自立を目的に介助者である母と患児に植物を介在させるプログラムを行った。母親の言動を分析し、プログラム中の母子関係の変化を調査した結果、植物を介在させることで、プログラム中の患児とのかかわりに変化がみられ、母子の関係性の改善の一助となった。

Abstract

Physically handicapped children residing their homes have much opportunities to make contacts with their mothers, thus they have difficulties in establishing "domains that parents cannot keep eyes on" required for preparation of independence in adolescent period. The domains include their appearance, sexuality, and anxiety to the future that are distress to them. The author and others provided horticulture programs to a child with physical dysfunction and his mother living together at home to encourage his independence. All the remarks of the mother were collected, and the dynamics of mother and the child relationships were observed during each session. The study concludes that the mother-and-child relationship has improved when nurturing plants together in cooperative way during each session.

はじめに

近年の医療技術の発展により、重い疾患を持つ子どもの命が救われるようになった。中でも、上下肢、体幹を自らの意志で自由に動かすことのできない肢体不

自由児は、生活の援助を家族に依存することが多くなり、特に母親との接触が健常児と比較して多い(松原・山岡 1968)。一般的に思春期に入ると子どもは容姿や性の悩み、将来の夢など、大人には言えない秘密を持ち始める。このような「親の目の届かない領域」(林 2010)を作るとは思春期における自立の一助となる。母親との密接な関係で、秘密を持つことのできない環境は、子どもの自立の阻害要因である(林 2010)。筆

2012年7月10日受付。 2012年10月20日受理。

日本園芸療法学会誌 5 : 31-34. 2013. 事例研究。

者は、母親との身体接触が多い患児の場合でも、「親の目の届かない領域」を持ち、母親と精神的に距離をとることは可能なのではないかと考えた。そこで、本研究では患児の自立を目的に行った植物介在プログラムから、母親が患児にどのような影響を与えているのかを母親の言動から探り、肢体不自由児と在宅ケアを行う母親の関係性の変化に植物を介在させることの影響を検討することとした。

1. 症例

1) 14歳男児（以下T児）の基礎的情報

脳腫瘍後遺症のため両上肢両下肢全廃、そして機能喪失。身体障害等級1級1種。X-5年10月に脳腫瘍のためA病院へ入院、同12月に摘出手術、気管切開、放射線治療を開始。同月に水頭症と髄膜炎を併発する。X-4年10月Bセンターへ転院。X-3年から現在までCセンターで、作業療法、理学療法、言語聴覚療法を行う。現在、両親と祖母の4人で生活をしている。気管切開のため発話は困難で周囲とのコミュニケーションは口の動きや50音表を使って行い、普段はベッド上で生活をしている。X年4月より特別支援学校へ通う。

2) 母親（キーパーソン）

T児の脳腫瘍発症前までは都内で会社員として働く。T児の入院後は会社を辞めてパートで働くようになる。X年3月に特別支援学校通学のため、パートを辞めT児の送迎や授業の付き添いを行い、日常の医療的ケア（痰吸引、経管栄養、気管切開管理）を主に行う。X年5月に行った面談の際には、放射線治療によって知的な問題が起こっていないか心配しており、「身体や知的に刺激を与えるような活動をしてほしい」と述べた。また、通常の教育を受けさせたいとのことで、X年4月に特別支援学級が一番上のクラスにT児を入学させたと話す。

3) 記録方法

問題志向型診療記録で用いられるSOAP形式を使って、セッション中の患児・母親の言動の記録を行った。患者一人一人の問題を明確に理解するために、国際的に広く用いられている記録方法である(Kettenbach 2000)。活動中のT児と母親の発言を主観的情報、動作や様子を客観的情報、それらをもとに計画や方向性を記録した。

2. 園芸療法経過と結果

1) 実施内容

X年4月14日～9月22日の約5か月間、T児の主体性の向上を目的とし、計14回の園芸療法プログラムを実施した。園芸療法学生（以下HTS）2名が患児宅へ訪問し、1時間の個別セッションを行った。3回目（5月11日）のセッション終了後、母親に個別面接を行い、園芸療法プログラムへの要望などを聞いた。園芸療法プログラムは、T児が関心をもって取り組めるように種まきから収

穫・調理・加工などの一連の作業や植物との様々なかわり方を取り入れプログラムを行った（表1）。

表1. 園芸療法プログラム内容。

回数・日付	活動内容
1 4/14	ラディッシュスープ作り
2 4/28	種当てクイズ・種まき①
3 5/11	種まき②
4 5/23	プランターへ植え替え
5 6/1	フラワーアレンジメント
6 6/22	多肉植物の挿し木
7 6/29	給水機作り
8 7/14	レイズドベッドの測定・色塗り
9 7/21	葉っぱのスタンプ
10 7/28	レイズドベッドの設置
11 8/11	植物のラベル作り
12 8/25	多肉植物の植え替え
13 9/8	藍の葉のたたき染め
14 9/22	ゴーヤシェイク作り

2) プログラム中の母親の様子の経過（結果）

1回目 T児と離れた場所や、T児が見えない場所で作業をすることに対して、T児の様子を確認するなど不安な様子を見せた。**2回目** 作業を行うT児に対しての声掛けが多く、終始そばを離れることはなかった。**3回目** 作業に対して消極的なT児を叱り、手首をつかんで誘導する様子が見られた。**4回目** ベランダでのT児の作業に心配しながらも、母親も土入れを楽しんで行っていた。**5回目** T児の正面から手を伸ばしてサポートし、余った花をT児の作品に差し込む。**6回目** T児の向かい側に座り、はさみを使うT児を心配しながら見守る。**7回目** HTSとT児の関わりを見守り、手を出すことはない。**8回目** T児が作業をしやすいようにモノをどかさず程度、一緒に色塗りを行う。**9回目** 不安そうな様子で、やりにくそうにしているT児に手を貸すが途中から見守る。**10回目** HTSとT児が二人で遊んでいるのを少し離れて見守っている。小さなゴーヤがなっているのを見つける。**11回目** T児を心配する様子はなく、HTSやヘルパーと会話を楽しみ、プログラム中T児と離れてベランダで植物の世話をを行う。**12回目** T児やHTSと話をしながら見守る。T児椅子に座れるようになったことに驚く。**13回目** T児のペースに合わせて一緒に作業をする。**14回目** HTSとの交流を積極的に行う。

3. 考察

母親のT児とのかかわり方を考察するために、プログラム中の、母親のT児とのかかわりと、植物とのかかわりを5段階の項目に分け配点し(表2)、グラフを作成した(図1)。得点が低い程T児と離れていても不安がないことを示している。同様に母親の植物とのかかわり方の変化についても項目に分け、得点の高いほど主体的に植物とのかかわっていることを示す。2本のグラフの開きが大きいほど、プログラム中の母親の視点の比重がどちらかに向いている傾向を示している。母親の視点がどのように移行していったかを考察するために、母親の言葉と植物のかかわり方を比較することとした。また、SOAP記録から、母親のT児に対する

発言の変化と、植物とのかかわりの変化を表3に示した。発言の養育態度の分類方法は、養育態度尺度（鈴木ら1985）を採用した。鈴木らは、3つの因子①「受容的・子ども中心的な関わり」②「統制的関わり」③「責任回避的関わり」を設定している。今回の症例は、子どもとの関わりを拒否する「責任回避的な関わり」は見られなかったことから「受容的・子ども中心的な関わり」とそれに対峙する「統制的な関わり」に分類した。母親がHTSに対して発言した内容は網掛けで表記する。

1) 母親とT児の植物とのかかわりの変化

前期 (1回目~5回目)

1回目から3回目までのプログラム中の母親のT児とのかかわりはグラフで高い値を示し、T児のそばを離れることの不安が強い。T児がHTSとうまくかかわることが出来るようにT児に作業を強要していた。4回目(植え替え)は母親が土入れ作業に集中し少しの時間、T児と離れて作業を行う様子が見られたが、5回目ではT児が花に興味を示さないにも関わらず、「花大好

きだよね」と言う母親の言葉にT児が誘導され、完成したT児の作品に母親が手を加える過干渉な様子がある。植物とのかかわりは、最も低い値を示した1回目はT児が土を扱うことをさせず、収穫は母親が行いあらかじめ丁寧に洗い慎重に扱っていた。2・3回目はT児の植物への興味を引き出そうと声かけを行い、T児のリハビリのための材料として植物を扱う。しかし前半で最も高い評点の4回目(植え替え)では、発芽した植物がしっかりと根を伸ばしている様子を見て、「かわいいね、ちゃんと大きくなってんだね」といい、生長を実感する様子が見られた。T児に付き添い、植物とのかかわる余裕のない様子が見られるが、時折園芸作業を楽しむ姿があった。

中期 (6回目~9回目)

6回目以降、T児とのかかわりのグラフの変化が一定になり、T児を見守ることが多くなる。定期試験前の7回目では、興味を持ったことを頑張ればよいと述べ、T児をあるがままに受け入れようとする姿勢や「Tくんにも(ひげ)生えるかな」と性徴を楽しみにするような将来への期待が語られ始めた。

植物とのかかわりに関しても、5回目から9回目は比較的グラフの変化が安定している。この間の植物の世話は、植物に詳しい祖母が水やりや手入れを行っている。6回目は、蔓の伸び始めた植物に支柱の代わりに菜箸をさして対処している。母親に尋ねると「とりあえずなんですよ」と控えめに世話をしたことをHTSに報告した。リハビリの材料であった植物から、次第に愛着が芽生え始めている様子うかがえる。

後期 (10回目~14回目)

T児とのかかわりは、11回目以降、不安感がほぼなくグラフが最も低い値で推移している。T児が集中して作業に取り組む中で、母親はヘルパー・HTSと共に会話を楽しんでいた。またHTSと共にベランダで植物

表2. 母親の不安度と植物とのかかわりの関係。

項目	T児とのかかわりかた	植物とのかかわりかた
1	T児から離れた場所です活動する	リハビリの道具としてかかわる
2	T児を奥守りながら、HTSなどと別の会話をする	興味を持っているが消極的なかわり
3	T児とHTSのかかわりを見守る	期にかけて必要な世話をを行う
4	T児とHTSのサポートをする	植物の生長に気づき、愛着がわく
5	T児をサポートするためそばを離れない	植物の生長を楽しむ、プログラム以外でも積極的に関わる

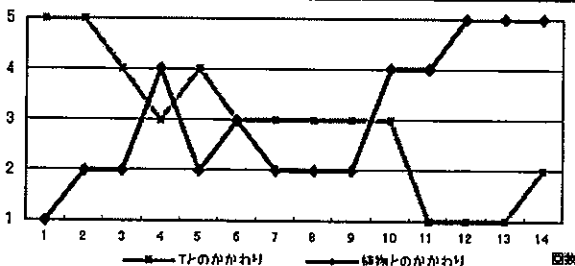


図1. 園芸療法の経過と共に変化する母親とT児および植物の関係。

表3. 園芸療法場面における、母親のT児に対する言葉かけと将来に対する発言の変化。

母親のT児に対する発言	T児の主体性を尊重する	植物とのかかわり方
① エプロンしようか・大変だね お兄ちゃんの重うこと聞きなさい 学校よりも楽しそうだったわ		「ラディッシュ」リハビリの素材として扱い、土で汚れることを嫌がる
② よかったね・離れば起きるね・自分で作ったもんね すごいね、お母さん楽しみだな。(ゴキブリ)頑張らなさいね	すごいね、お母さんわからないよ。どうだろう、知っているのがある？ お母さんにも教えてくれる？。まだやりたそうだったね	「種まき」少し興味はあるが消極的
③ 残念だったね。ちゃんとやりなさい ここに入れるんでしょ。かわいそうに芽が出てこれなくなっちゃうよ。 やめなさい。今日は何日だった？。ちゃんとあいさつしなさい	なにに どの芽が出そうかな	「ひげ」の芽が出そうかな」と興味はあるが、消極的。
④ (ベランダ) 初めてのだもんね。なにをしたの？。楽しいよね (交換会) 楽しかったね	元気に大きくなってんだね、かわいいね そうだよ、私もやりたいよね	「植え付け時」根が伸びて成長していることに驚く 全表に集まっていたが、室に祖母が水やりをする。
⑤ (クイズ) 楽しかったよね。(花) 大好きだよ T児くんも行ってみたいね。どこが正面とかも考えるんだよ	T児ありがと ちょうど使いたかったの	(支柱立て) 支柱の代わりに菜箸を立てる (水やり) 水やりはどの程度必要かHTSに尋ねる
⑥ おばあちゃんが植物好きだからそれかな。あれ、しまつちやうの 4つでいいの？まだ入るよ	Tくん欲しいね。ここなら見えるね お母さん頑張って見えなかったの？ 何に後ろんだらうね。(ヒゲ) 生えるかな	(支柱立て) 支柱の代わりに菜箸を立てる (水やり) 水やりはどの程度必要かHTSに尋ねる
⑦ ごとうの大好きだもんね	大丈夫？ 気を付けてね 区別目はプロシカに入れたらいいです。大丈夫ですか？ 区別はプロシカに入れたらいいです。	(ネット取り付け) HTSが作業をするのを、室内からみる
⑧ もっと優しくやらないと ほら、Tくんちゃんと見て	すごいね、お母さん忘れちゃったよ。なんだろうね、においした？ 何笑ってるの？ 教えておばあちゃんにね。お母さんで洗えばいいの？ 笑って	(ゴキブリの餌) 「きれいなカーテン」 「きれいなカーテン」と眺めるのみ消極的
⑨ 好きいでね、高いんだら。ほんとは、Tくんよかつね (友達と違って)よかつね	頭の花咲いてちやうどお母さんみたいだね。お母さんで洗えばいいの？ 笑って	(ゴキブリの餌) 自分でリボンをつけたいと話し、興味を持つ (臭気の処理) 父親、HTSとともに臭気の出た葉の処理をする
⑩ Tくんごとうの大好きだもんね	前の家においてきちゃったんだよ。最近いつも(笑)に〇書くんです。私にもやりますよ50番表の角で叩いたりして。山の中でもう行かないと思いました	(ゴキブリの餌) 前日に収穫したゴキブリをHTSに見せる
⑪ Tももう友達がいね。家にももつまんないもんね 大きくなったよ	(ゴキブリの餌) なにしてるの？。気になるんだよね。きいのがいいんだ 区別はプロシカに入れたらいいです。	(ゴキブリの餌) ゴキブリを家裏で食べたことを報告。「買って来たらいい」という祖母の言葉に反応する。
⑫	Tくんほんとに知っているの？。飽きるのかな？。すごいきれいにできたね 区別はプロシカに入れたらいいです。区別はプロシカに入れたらいいです。	(ゴキブリの餌) ゴキブリ料理の写真をHTSに見せる
⑬	かっぱいもんね。お母さんで洗えばいいの？ 笑って	(ゴキブリの餌) ゴキブリ料理の写真をHTSに見せる

の成長を観察しT児のそばを離れることに不安な様子は見せなかった。14回目では、固形物を食べられるようになったことを中心に、T児の将来への期待が語られた。T児に刺激を与えたい焦りや不安感は、回数を重ねるごとに減少し、成長への期待感やT児をありのままに受け入れる姿勢へと変化した。

植物とのかかわりは、10回目にグラフが大きく変化し、母親は「どこにあるのか分からなくなっちゃうから、リボンとかつけたほうが良いかもしれないですね」と、ゴーヤの生長を気に掛け始めた。11回目以降は高い得点を保ち継続して世話する様子が見られ、病気にかかった葉の処置をし、実ったゴーヤの生長を見守り、自ら収穫し調理をして家族にふるまった。また、以前もゴーヤを家族で育てた経験があり、収穫したゴーヤを飾っているうちに食べられなくなってしまった思い出をHTSに話した。12回目は久しぶりにベランダから植物を眺めたT児に「大きくなったよねー」と大きく生長していく様子をT児と眺め、それまであまり植物に関心を示さなかったT児も驚いている様子であった。ゴーヤが実ったことを境にして母親が植物に興味を持ち、主体的にかかわり始めたことでプログラム中に植物とかかわる時間が増え、T児に付き添う時間が必然的に減少していった。

2) まとめ

母親はT児への園芸療法プログラムの中で、T児に作業を促し強要し、時にはしつけとして叱り、T児の様子を常に見守りながら、母親としての教育的なかかわりを行い、その母親の介入が、T児の主体的な行動を妨げる要因となっていた。しかし、母親が次第に植物へ関心を向けることで、プログラム中に植物とかかわる時間が増え、T児と離れる時間が確保されていき、教育の場となっていたT児へのプログラムは、T児がHTSとかかわりながら主体的に活動できるプログラムへと展開した。T児とHTSの時間が確保されることによって、母親が知らないHTSとのかかわりが生まれることが、思春期における「親の目の届かない領域」を作り、T児の自立のための一助となると考える。

母親の興味を引いた対象として、植物が日々目に見える変化があり、それに気づく喜びがあったこと、期間の限定された終わりのあるものだったこと、成果物を共有できるものであり、また、ゴーヤに対して家族共通の思い出があったことが、T児家族にゴーヤが無理なく受け入れられた要因であったと考えられる。そして、母親が植物へ興味を持つことができるようになったことには、安心して母親がプログラムに参加できるように関わり方を変化させながら環境設定を行い、T児を託すことができるHTSとの関係が築かれていることが必要であった。T児から目を話すことのできる環境が整ったからこそ、母親は植物に目を向けることができたのである。

本事例で行った園芸療法は、直接患児に作用するだけでなく、間接的に母親(環境)に影響を与えることが、結果として患児に良い影響をもたらすこととなった。在宅というプライベートな空間でも、母親が無意識に患児とのかかわりを変化させることができたのは、植物を媒体とすることで自然な形で治療構造を整えることができたからではないだろうか。

子どもを見ていた母親が子ども以外に育てる対象を受け入れることで生じる視野の広がり、共依存関係にある母子間にも有効であると考えられる。

また、今回母親に見られた視点の移行は、植物が移行対象となる可能性を示唆した。このことから、喪の作業(グリーフワーク)において、悲しみを軽減させる移行対象としての植物の役割を今後の課題として研究を進めていきたい。

引用文献

- 林ももこ：思春期とアタッチメント。みすず書房。2010。
- Kettenbach, G (柳澤健監訳)：理学療法・作業療法のSOAP ノートマニュアル—問題志向型診療記録の書き方—。協同医書出版社。2000。
- 松原達也・山岡春美：肢体不自由児の親の養育態度。特殊教育学研究 5(2):32-43。1968。
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦：子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成：愛知教育大学研究報 34 教育科学編:139-152。1985。